

## 報 告

## 大学生の避妊に対する態度と行動とのずれに関する検討

山口 (久野) 孝子, 小笠原昭彦, 堀田 法子

## 〔論文要旨〕

大学生を対象に質問紙調査を行い、避妊に対する態度と行動とのずれについて検討した。男女とも避妊を「いつもしている」と回答した者は「相手もしくは自分が避妊をしていないとき」に毅然として「性交をやめる」ことができ、その背景に妊娠や将来のことなどに対する積極的な理由をもっている、すなわち自我関与の強さがみられた。一方「ときどき・しない」と回答した者は同じ状況に遭遇したときに、曖昧な態度で「性交」に臨み、消極的な理由しかもっておらず、自我関与の弱さが窺われた。

Key Word : 大学生, 性教育, 避妊, 自我関与

## I. 緒 言

平成12年、わが国の国民運動計画として「健やか親子21」<sup>1)</sup>が策定され、その主要4課題の1つに「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」があげられた。この課題における具体的検討事項および数値目標に「十代の人工妊娠中絶実施率」を減少傾向にすることや「避妊法を正確に知っている18歳の割合」を100%にすることなどが盛り込まれ、学校や地域では青少年の性の問題や課題への取り組みが一層充実していることと思われる。しかしながら、20歳未満、20~24歳の人工妊娠中絶（以下、中絶とする）は多少減少傾向であるものの、依然として高値である<sup>2)</sup>。中絶は、身体への侵襲、将来の妊娠への不安や子どもへの罪悪感という心の傷などさまざまな影響を及ぼすと考えられる。また、望まない妊娠の場合、たとえ出産できたとしても、両親の親役割の獲得が不十分な段階では自己の欲求と子どもの世話との間に葛藤を生じ、児童虐待や離婚等の問題を引き起こすことも推測される。したがって、青少年の心身の健康や

子どもの健全な成長・発達という観点からも望まない妊娠や中絶は避けるべきである。

著者ら<sup>3)</sup>は、青年期の望まない妊娠や中絶の背景要因の一部として、自己同一性や自尊感情の低さに注目した。すなわち、自己の確立が不十分であり、また自分に自信がなければ性の場面で適切な意思決定や主体的な行動選択ができず、相手と建設的な関係を築くことが困難であるという仮説のもとで調査を行った。その結果、自己同一性および自尊感情と避妊に対する態度との関連においては仮説が概ね支持されたものの、自己同一性および自尊感情と実際の避妊行動との間には有意な関連が認められなかった。また、男女とも避妊が必要という認識と実際の避妊行動との間にずれがみられた。これは、既報<sup>3)</sup>でも述べたとおり実際の避妊行動には自分自身の要因以外に相手の自己同一性の状態や避妊に対する態度などが関与するためと考えられる。今後の課題として、自己同一性および自尊感情と避妊行動との関連をカップル毎に分析を行う、もしくは避妊に関する相手の影響を排除したうえで対象者本人の分析を行うこと、避妊

A Study of the Gap between University Students' Attitudes and Actual Behavior concerning Contraceptives (1822)

Takako YAMAGUCHI (KUNO), Akihiko OGASAWARA, Noriko HOTTA  
名古屋市立大学看護学部 (研究職)

受付 06. 5. 8

採用 06.11.16

別刷請求先: 山口孝子 名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1  
Tel/Fax : 052-853-8058

に対する態度と行動とのずれについて分析する必要があることがあげられた。そこで本研究では、避妊に対する態度と行動とのずれについて、避妊の実施・非実施で避妊に対する態度の特徴および自我関与のあり方を探ることを目的として、既調査<sup>3)</sup>で得られた自由記述を中心とした分析を行ったのでその結果を報告する。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象および期間

A県下にある4年制大学(4校)の医療・教員養成系の学部・学科に在学する18~23歳の男女学生計710人を対象に2000年4~7月に調査し、回収率は100%、また以下の条件を満たした有効回答数は289人(有効回答率40.7%)であった。白紙回答は3部であった。

本研究では未婚者、性別が明らかな者、性交経験者、避妊の頻度への回答がある者(357人)で、かつ「親しく交際している異性の友人がいる」と仮定して、その人から性交を求められたら(以下「性交への意思決定」)という設問に性交に応じる可能性がある「性交に応じる」、「どちらかといえば応じる」、「どちらかといえば応じない」、「わからない」のいずれかを選択し(339人)、その際避妊が「必要」と回答した者289人を分析対象とした(男子104人、女子185人)。

### 2. 調査内容および方法

調査内容は、性に関する態度(性交への意思決定、避妊に対する態度)とその理由、未婚・既婚の別、性別、年齢、性交経験の有無(最近1年間)、避妊の頻度である。避妊に対する態度は、既報<sup>3)</sup>同様、避妊を成功させるための5つの構成要素(能力)として「性交時、避妊は必要だと思うか(以下「避妊に対する潜在的準備」)」、「避妊について相手と話し合うことができるか(以下「コミュニケーション能力」)」、「性交を経験する前に自分で避妊の知識・技術を習得することができるか(以下「習得能力」)」、「避妊具を自分で入手することができるか(以下「入手能力」)」、「相手もしくは自分が避妊していなかった場合(以下「危機対処能力」)を設定した。「避妊に対する潜在的準備」は「必

要である」~「必要でない」の4件法、「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「入手能力」は「できる」~「できない」の4件法、「危機対処能力」は「性交をやめる」~「性交する」の4件法の他、「わからない」をそれぞれに加えて回答を求めた。

調査の実施にあたっては、調査校に赴き、目的、自由意志による参加、個人情報守秘について説明し、同意が得られた者のみ無記名自記式の質問紙に回答してもらった。回答者のプライバシーを保護するため、回答にあたっては学生間で回答が見えないよう配慮し、また参加の有無は成績に無関係であることなど注意事項を説明した。質問紙の回収は個別の封筒に密封して行った。

### 3. 分析方法

避妊の頻度において、避妊を「いつもしている・した」と回答した者を実施群、避妊を「ときどき」、「しない・しなかった」と回答した者を非実施群とし、性に関する態度を男女別に集計した。また「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「入手能力」、「危機対処能力」について「わからない」と「無回答」を除き、「できる」とそれ以外の回答、「性交をやめる」とそれ以外の回答に分類し、男女別に避妊の実施・非実施で $\chi^2$ 検定を行った。

自由記述の分析は、基本的には回答に特別な解釈を加えることなく紙面に記述された内容そのものを積極的理由(態度)、消極的理由(態度)、分類不能の3カテゴリーに分類した。一文に2つ以上の要素がある場合は、回答者の主とする理由を判別することができ、かつ積極的理由と消極的理由の両方が含まれていなければ積極的理由、もしくは消極的理由のいずれかとした。客観性を保つため、心理学および小児看護・保健学を専門とする研究者3人によって分類結果の確認を行った。なお、具体的な分析基準を以下に示す。

#### 1) 積極的理由(態度)

各質問に対し、自分の問題として積極的、主体的、建設的、具体的、前向きに捉えており、自分の意志や自我関与が窺えるもの。また、恐れ、驚異として知覚・認識している場合も含め

た。行為の主体は、基本的に本人、もしくはお互いとする。今回は一般論、必要性を述べたものもこの分類とした。

## 2) 消極的理由 (態度)

各質問に対し、自分の問題として消極的、無関心、他人任せ、他人事に捉えており、自分の意志や自我関与が感じられないもの。また、自己中心的、本能、無責任なものも含めた。

## 3) 分類不能

積極的理由、消極的理由のいずれにも分類不能、もしくは判断に迷うもの。具体的には以下のようなものがある。

- ・具体性に欠ける (抽象的)
- ・主語がなく、行為の主体が不明である
- ・現在の交際の現状や結果、願望を述べている
- ・社会的環境一般を述べている
- ・一文に積極的態度、消極的態度の両方の要素がある
- ・設問への対応を述べるなど、設問に対する理由ではない

データの集計および統計処理には SPSS for Windows 12.0 を使用し、有意水準は 5% 未満とした。

## III. 結 果

### 1. 対象の背景

対象の背景を表1に示す。男子は平均年齢±標準偏差20.5±0.9歳、女子は同じく19.9±1.1歳であった。避妊の頻度は「いつもしている・していた」と回答した者は男子65人(62.5%)、女子119人(64.3%)、「ときどき」と回答した者は男子32人(30.8%)、女子57人(30.8%)、「しない・しなかつた」と回答した者は男子7人(6.7%)、女子9人(4.9%)であった。

表1 対象の背景

		n=289	
項	目	男子(104人)	女子(185人)
	平均年齢±標準偏差	20.5±0.9	19.9±1.1
避妊の頻度	いつもしている・していた	65 (62.5)	119 (64.3)
	ときどき	32 (30.8)	57 (30.8)
	しない・しなかつた	7 (6.7)	9 (4.9)

平均年齢：歳  
避妊の頻度：人数 (%)

ていない・しなかつた」と回答した者は男子7人(6.7%)、女子9人(4.9%)であった。

## 2. 性に関する態度

性に関する態度(単純集計)を表2に示す。性交への意思決定は、男女とも避妊の実施・非実施に関わらず「性交に応じる」と回答した者が最も多く、「どちらかといえば応じる」をあわせると約90%の者が性交に応じると回答した。避妊の実施・非実施での比較は、実施群より非実施群に「性交に応じる」と回答した者が多かった。

性交時の避妊では、男子は避妊の実施・非実施に関わらず「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「入手能力」で「できる」との回答が最も多かったが、「危機対処能力」では「性交をやめる」と回答した者は少なかった。一方、女子は避妊の実施・非実施に関わらず「コミュニケーション能力」と「入手能力」で「できる」との回答が最も多かったが、「習得能力」では「多分できる」と回答した者が最も多かった。「危機対処能力」では女子の実施群では「性交をやめる」との回答が最も多かったが、非実施群では「性交をやめる」と回答した者が少なかった。また、「習得能力」と「入手能力」では避妊の実施・非実施に関わらず「できる」との回答が女子より男子に多くみられた。

## 3. 避妊に対する態度

避妊に対する態度を表3に示す。先行研究<sup>3)</sup>同様、性行動の特殊性や確実な避妊という観点から4件法の選択肢のうち「できる」と回答した者とそれ以外に分類し、避妊の実施・非実施で比較した。男子は「コミュニケーション能力」、「入手能力」、「危機対処能力」で、女子は「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「危機対処能力」において、実施群に「できる」、「性交をやめる」との回答が多く、非実施群に「それ以外」との回答が多く、「危機対処能力」に有意差が確認された(男子： $\chi^2=8.8$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ , 女子： $\chi^2=18.0$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ )。

表2 性に関する態度 (単純集計)

項 目	男子 (104人)		女子 (185人)		
	実施群 (65人)	非実施群 (39人)	実施群 (119人)	非実施群 (66人)	
性交	性交に応じる	54(83.1)	35(89.7)	66(55.5)	48(72.7)
	どちらかといえば応じる	8(12.3)	2( 5.1)	39(32.8)	18(27.3)
	どちらかといえば応じない	1( 1.5)	1( 2.6)	7( 5.9)	0( 0.0)
	わからない	2( 3.1)	1( 2.6)	7( 5.9)	0( 0.0)
コミュニケーション能力	できる	34(52.3)	18(46.2)	72(60.5)	30(45.5)
	多分できる	20(30.8)	12(30.8)	29(24.4)	22(33.3)
	多分できない	4( 6.2)	6(15.4)	9( 7.6)	9(13.6)
	できない	4( 6.2)	1( 2.6)	4( 3.4)	1( 1.5)
	わからない	0( 0.0)	2( 5.1)	2( 1.7)	1( 1.5)
	無回答	3( 4.6)	0( 0.0)	3( 2.5)	3( 4.5)
習得能力	できる	38(58.5)	22(56.4)	43(36.1)	20(30.3)
	多分できる	22(33.8)	9(23.1)	48(40.3)	31(47.0)
	多分できない	3( 4.6)	4(10.3)	12(10.1)	8(12.1)
	できない	1( 1.5)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
	わからない	1( 1.5)	3( 7.7)	14(11.8)	6( 9.1)
	無回答	0( 0.0)	1( 2.6)	2( 1.7)	1( 1.5)
入手能力	できる	62(95.4)	36(92.3)	52(43.7)	31(47.0)
	多分できる	2( 3.1)	3( 7.7)	30(25.2)	18(27.3)
	多分できない	0( 0.0)	0( 0.0)	33(27.7)	12(18.2)
	できない	1( 1.5)	0( 0.0)	3( 2.5)	4( 6.1)
	わからない	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 0.8)	1( 1.5)
	無回答	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
危機対処能力	性交をやめる	15(23.1)	1( 2.6)	57(47.9)	10(15.2)
	多分性交をやめる	22(33.8)	6(15.4)	31(26.1)	11(16.7)
	多分性交する	10(15.4)	14(35.9)	17(14.3)	28(42.4)
	性交する	9(13.8)	15(38.5)	3( 2.5)	6( 9.1)
	わからない	9(13.8)	3( 7.7)	11( 9.2)	11(16.7)
	無回答	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)

人数 (%)

表3 避妊に対する態度

項 目	コミュニケーション能力		習得能力		入手能力		危機対処能力						
	できる	それ以外*1	できる	それ以外*1	できる	それ以外*1	性交をやめる	それ以外*2					
男子	実施群	34(54.8)	28(45.2)	ns	38(59.4)	26(40.6)	ns	62(95.4)	3( 4.6)	ns	15(26.8)	41(73.2)	**
	非実施群	18(48.6)	19(51.4)		22(62.9)	13(37.1)		36(92.3)	3( 7.7)		1( 2.8)	35(97.2)	
女子	実施群	72(63.2)	42(36.8)	ns	43(41.7)	60(58.3)	ns	52(44.1)	66(55.9)	ns	57(52.8)	51(47.2)	**
	非実施群	30(48.4)	32(51.6)		20(33.9)	39(66.1)		31(47.7)	34(52.3)		10(18.2)	45(81.8)	

\*検定による

\*1:「多分できる」,「多分できない」,「できない」と回答した者の合計

\*2:「多分性交をやめる」,「多分性交する」,「性交する」と回答した者の合計

人数 (%)

\*\*p&lt;0.01

表4 避妊に対する態度と自我関与との関連

項目	避妊に対する潜在的準備				コミュニケーション能力								習得能力							
	必要				できる				それ以外*1				できる				それ以外*1			
分類	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6
実施	34	0	2	29	14	0	5	15	5	3	3	17	7	0	8	23	0	5	6	15
男 群	52.3	0.0	3.1	44.6	41.2	0.0	14.7	44.1	17.9	10.7	10.7	60.7	18.4	0.0	21.1	60.5	0.0	19.2	23.1	57.7
子 非実	23	1	2	13	5	0	2	11	4	3	2	10	2	0	5	15	1	3	3	6
施群	59.0	2.6	5.1	33.3	27.8	0.0	11.1	61.1	21.1	15.8	10.5	52.6	9.1	0.0	22.7	68.2	7.7	23.1	23.1	46.2
実施	88	0	4	27	36	2	14	20	10	10	11	11	18	0	3	22	13	5	8	34
女 群	73.9	0.0	3.4	22.7	50.0	2.8	19.4	27.8	23.8	23.8	26.2	26.2	41.9	0.0	7.0	51.2	21.7	8.3	13.3	56.7
子 非実	45	0	3	18	13	0	5	12	11	8	2	11	6	0	1	13	6	4	9	20
施群	68.2	0.0	4.5	27.3	43.3	0.0	16.7	40.0	34.4	25.0	6.3	34.4	30.0	0.0	5.0	65.0	15.4	10.3	23.1	51.3

項目	入手能力				危機対処能力											
	できる				それ以外*1				性交をやめる				それ以外*2			
分類	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6	積*3	消*4	不*5	NA*6
実施	17	0	9	36	0	1	0	2	7	0	0	8	4	7	4	26
男 群	27.4	0.0	14.5	58.1	0.0	33.3	0.0	66.7	46.7	0.0	0.0	53.3	9.8	17.1	9.8	63.4
子 非実	14	0	4	18	0	0	1	2	0	0	0	1	2	11	2	20
施群	38.9	0.0	11.1	50.0	0.0	0.0	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	100.0	5.7	31.4	5.7	57.1
実施	28	2	7	15	11	24	3	28	33	2	0	22	14	11	5	21
女 群	53.8	3.8	13.5	28.8	16.7	36.4	4.5	42.4	57.9	3.5	0.0	38.6	27.5	21.6	9.8	41.2
子 非実	14	0	4	13	3	15	1	15	5	0	1	4	4	10	8	23
施群	45.2	0.0	12.9	41.9	8.8	44.1	2.9	44.1	50.0	0.0	10.0	40.0	8.9	22.2	17.8	51.1

上段：人数, 下段：%

\*1: 「多分できる」, 「多分できない」, 「できない」と回答した者の合計  
 \*2: 「多分性交をやめる」, 「多分性交する」, 「性交する」と回答した者の合計  
 \*3: 積極的理由 (態度)  
 \*4: 消極的理由 (態度)  
 \*5: 分類不能  
 \*6: 無回答

4. 避妊に対する態度と自我関与との関連

避妊に対する態度と自我関与との関連を表4に示す。男子の「コミュニケーション能力」, 「習得能力」, 「危機対処能力」で, 女子のすべての能力において, 「できる」と回答した者では実施群に積極的理由が多かった。また男子の「避妊に対する潜在的準備」, 「コミュニケーション能力」, 「習得能力」, 「危機対処能力」で, 女子のすべての能力において, 「それ以外」と回答した者では非実施群に消極的理由が多かった。さらにこれらに関して, 積極的理由はすべての能力で男子より女子に多かった。消極的理由は「習得能力」, 「危機対処能力」では男子に多く, 「コミュニケーション能力」, 「入手能力」では女子に多かった。

避妊に対する態度の理由のうち, 主な回答を表5に示す。

IV. 考 察

本研究の目的である避妊に対する態度と行動とのずれについて検討するため, 避妊は「必要」と明確に回答した者のみを分析対象とした。避妊の頻度は, 男女とも過半数が「いつもしている・していた」と回答したが, そうでない者も約1/3みられ, 全国調査<sup>4)</sup>とほぼ同様の結果であった。今回の分析においても避妊に対する態度と行動とのずれが確認されたことから, 性に対する態度は避妊の実施・非実施で分析した。

「性交への意思決定」は, 避妊の実施・非実施に関わらず多くの者が「性交に応じる」と回答したことから, 性交に対し大変寛容であることが窺われる。また, 実施群より非実施群に寛容な者が多かった。これは, 非実施群は性交の意味や性交から派生するさまざまな問題につい

表5 避妊に対する態度の主な理由（自由記述）

項 目	積極的理由（態度）	消極的理由（態度）
避妊に対する潜在的準備	学生だから子どもを育てられる経済力が ない 親としての自信や能力がなく責任が もてない 望まれない命を作ってはいけない お互いにまだやりたいことがある 妊娠したら・子どもができれば困る	今、私自身学生であるというのもあるかも (男子)
コミュニケーション能力	真剣に付き合っていればできる 信頼関係があればできる 自分（たち）の将来にかかわること 妊娠したら・子どもができれば困る 大切・大事・必要・当然・当たり前 のこと 自分の体を大切にしている（女子） 自分の身は自分で守る（女子）	さめる（男子） 性交を目的としているように思われるのが嫌 (男子) あせている（男子） 本当に自分のことを大切にしてくれている人 なら考えてくれるのが当然（女子） 恥ずかしい（女子） 言い出しにくい（女子） すごい固い女って思われそうで不安（女子）
習得能力	大切・大事・必要・当然・当たり前 のこと 大切な人・好きな人だからこそ避妊 する（男子） 自分の体のこと（女子） 自分を守る（女子） 自己責任（女子） 何も知らずに行動するのは不安（女 子） 知識が深まったことで一層真剣かつ 慎重になる（女子）	若いから無理っぽい（男子） めんどくさいから大体でOK（男子） 特別勉強していない（男子） 避妊についてそこまで詳しくないうちに性交 してしまいそう（女子） 避妊の最もポピュラーなものがコンドームだ と思うけど、今まで触ったことがないから付 け方がわからない（女子） どこで正しい知識や技術を習得すればいいの かわからない（女子） 本屋とかで専門書を読もうと思っても難しい （女子）
入手能力	コンビニ・薬局・自販で買える 恥ずかしいことではない 大切・大事・必要・当然・当たり前 のこと 自分の体のこと（女子） 自分を守る（女子） 自己責任（女子）	必要ないから外出しのみでOK（男子） 恥ずかしい（女子） 人目が気になる（女子） 買いにくい（女子） 相手に任せてしまう（女子） 自分には買いに行きたくない（女子） 自分が買いに行く必要性を感じない（女子）
危機対処能力	リスクが高い・無責任な行為はすべ きではない 子どもができると困る・怖い・不安・ 嫌	膈外射精をすればいいかな どこかで多分子どもはできないと思っている 性欲を抑えられない・自分もしたくなっている 雰囲気流されそう（女子） 相手との関係が気まづくなるのが怖い（女子）

男女それぞれにおいて特有の回答には、自由記述の後ろに（男子）もしくは（女子）と示した

て深く考えることなく性交を軽く捉えているため、避妊に対してもルーズになっていると考えられる。関塚ら<sup>5)</sup>も、性に寛容な者は複数の性交パートナーがいるうえ、不確実な避妊行動であったことを報告した。さらに、若年妊娠者を対象とした調査<sup>6)7)</sup>で、未婚、学生・生徒である場合は多くの者が中絶を選択しているという現状より、本研究の対象においても今後、妊娠

や中絶の可能性が窺われた。

性交時の避妊では、男子は避妊の実施・非実施に関わらず「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「入手能力」で「できる」との回答が最も多かったが、女子は「コミュニケーション能力」と「入手能力」で「できる」との回答が最も多く、「習得能力」では「多分できる」と回答した者が最も多かった。さらに「習得能

力」と「入手能力」では、避妊の実施・非実施に関わらず「できる」との回答が女子より男子に多くみられた。これらより、今回の対象はすべて避妊が必要という認識をもっているためか、全調査対象を分析した結果<sup>3)</sup>より「できる」との回答が多く、好ましい態度を有しているといえる。また、わが国における青少年の避妊法ほとんどが男性用コンドームと陰外射精であり<sup>4)</sup>、もし本研究の対象の避妊法も男性用コンドームならば男子が避妊を習得することや避妊具を入手することはそれほど難しいことではないと思われる。しかし、女子では避妊の必要性を認識しているにも関わらず、全体的に避妊の習得や避妊具の入手が困難であることが示された。日本性教育協会の報告<sup>4)</sup>で避妊を実施しない理由に女子では「準備していないことが多い」が最上位となっており、女子が避妊具を入手し、それを保持するのは難しいことが窺われる。「危機対処能力」においては、男子の実施・非実施群、女子の非実施群で「性交をやめる」との回答が少なく、とくに男子は性交の直前で避妊ができていなかった場合、「性交をやめる」と明確な態度をとることは困難であることが示された。女子は男子より「性交をやめる」との回答が多くみられた点は、不確かな避妊の場合、当然の帰結として考えられる妊娠を憂慮したためと思われる。

避妊に対する態度では、男子は「コミュニケーション能力」、「入手能力」、「危機対処能力」で、女子は「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「危機対処能力」において、実施群に「できる」、「性交をやめる」との回答が多く、非実施群に「それ以外」との回答が多く、「危機対処能力」に有意差が確認された。これらより、避妊を実行するには避妊の必要性を認識できるうえ、友人から性交を誘われ、その際に相手もしくは自分が避妊していなかった場合、性交をやめると毅然とした態度がとれるかがとくに重要であることが明らかとなった。男子の「習得能力」については、結果の2(表2)で実施群に「できる」との回答が多かったものの、結果の3(表3)では僅かに非実施群の方が多くなった。今回、女子の「入手能力」ともに避妊の実施・非実施では大差はみられず、避妊行動の影

響要因としては弱いと考えられる。

次に避妊に対する態度と自我関与との関連を避妊の実施・非実施で検討したところ、男子の「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「危機対処能力」で、女子のすべての能力において、「できる」と回答した者の中では実施群に積極的理由が多くみられた。また男子の「避妊に対する潜在的準備」、「コミュニケーション能力」、「習得能力」、「危機対処能力」で、女子のすべての能力において、「それ以外」と回答した者の中では非実施群に消極的理由が多くみられた。これらより、避妊の実施に対し積極的な意志や自我関与が背景となり、避妊の非実施に対しては消極的な意志や自我関与が背景となっていることが示唆された。関塚ら<sup>5)</sup>も自己決定意志が高い者ほど確実な避妊行動がとれていることを報告した。男子の「避妊に対する潜在的準備」と「入手能力」については今回、無回答が多く、カテゴリ内の人数が少ないことも影響したと考えられる。さらにこれらに関して、積極的理由がすべての能力で男子より女子に多く、すなわち避妊の意思決定において女子の自我関与の高さが窺われた。消極的理由は、「習得能力」、「危機対処能力」で男子に多く、「コミュニケーション能力」、「入手能力」では女子に多かった。すなわち「習得能力」、「危機対処能力」では男子の自我関与の低さや困難さが、「コミュニケーション能力」、「入手能力」では女子の自我関与の低さや困難さが示され、自由記述からその具体的内容が明らかとなった。

「避妊に対する潜在的準備」は避妊が「必要」という認識の者のみを対象としたため、1名を除き避妊の実施・非実施に関わらず積極的理由であった。積極的自我関与を促進するには、生命の大切さや自分の行動に責任をもつこと、性交をするということは妊娠やそれから派生するさまざまな問題や課題があることを一般論や他人事ではなく学生である自分たち自身の問題として認識できるような教育が必要である。

「コミュニケーション能力」の積極的理由より、性に関する内容を話題にするには真剣な付き合いや信頼関係がなければ難しいことが示された。さらに女子では、適切な自尊感情を保持するとともに自己責任に対する自覚を高めるこ

とが重要といえる。消極的理由より、男子の自己中心的態度や女子の無関心・主体性のなさへの対応も必要と思われる。

「習得能力」の積極的理由より、男子は相手への思いやりが学習への動機づけとなり、女子では知識・技術が自分自身を守る手段であることが述べられていた。消極的理由より、男子は避妊を特別に学習するものという認識がないことがわかった。女子は知識の少なさを自覚していても、男性に依存する姿勢がみられた。また、習得の場所や方法の困難さの指摘から避妊の知識や技術の提供など具体的な性教育の必要性が感じられた。

「入手能力」の積極的理由より、男子では避妊具を入手しやすい環境にあると推測される。しかし、女子においては避妊具を入手することは困難であることが窺われたため、女子本人に対する認識・態度の変容と併せて、女性自身が入りやすい避妊具の開発や男性用コンドームのように広く普及されるような環境整備が求められる。

「危機対処能力」は全体的に積極的理由より消極的理由が多く、男子は妊娠の可能性が高い状況下で冷静に考え、禁欲することが難しいことが示された。女子は性における主体性が欠如し、雰囲気流されている様子が明らかとなった。また男女とも膈外射精を安易に捉えていたり、自分たちはまだ妊娠しないと考えており、避妊や妊娠に対する認識の甘さがあった。全国調査<sup>4)</sup>においても避妊を実施しない理由に「だぶん妊娠しない」、「めんどくさい」が多くみられた。町浦ら<sup>8)</sup>は、コンドームの使用頻度が少なくなるのはパートナーとの愛情が深まり、交際期間が長くなる場合であることを報告した。したがって、避妊が必要と思っても性交回数を重ねるにつれ妊娠への危機感が薄れ、避妊しないことに「慣れ」のようなものが生じる可能性も考えられる。

自由記述では「困る、怖い、嫌」等の感情表現が多くみられた。これらは妊娠・中絶することやそれらから派生する自分、相手、生まれてくる子どもに対するさまざまな問題・課題への知覚が性に関する態度に大きく関係していると考え、積極的理由へ含めた。

Health Belief Model<sup>9)</sup>において、疾病への恐怖感が保健行動に影響することが指摘されている。妊娠は病気ではないが、若年妊娠の多くが中絶を選択している現状<sup>6)7)</sup>より、大学生が妊娠を継続することは困難と考え、このような知覚をもち、望まない妊娠や中絶を避けることも必要と思われる。しかし、恐怖の知覚のみで確実な避妊行動がとれるとは限らない。自由記述では生まれてくる子どものことより自分自身のことを述べる内容が多かったが、生命を尊重し、大切に思うことができることがまず必須である。

本研究の対象はすべて避妊が必要と認識していた。しかし、必要性は理解していても実際に避妊行動がとれる者ととれない者がおり、その背景を比較検討することで確実な避妊行動への示唆を得ることを目的とした。その結果、避妊の各能力において概ね非実施群より実施群の方が好ましい態度を形成しており、それには積極的な意志や自我が関与していることが明らかとなったが、有意な関連性を十分証明するには至らなかった。先行研究<sup>10)11)</sup>で避妊の実施には避妊の意思表示のみではなく、その程度が強く関係していることや、コンドームの使用を促す要因としてコンドームに対する肯定的態度、膈外射精に対する否定的態度、規範的態度、およびコンドームを使用する意志が関連していることが報告されている。今後、確実な避妊行動を検討するには、避妊の能力をさらに吟味したうえで、単一の避妊の能力での分析ではなく自己同一性、自尊感情、避妊に対する態度、避妊法や避妊具に対する認識や使用する意志などさまざまな要因を総合的・複合的に分析や解釈できるモデルの作成をカップル単位で実施することが課題である。また既報<sup>3)</sup>でも述べたとおり、性行動は他の多くの保健行動とは異なり、相手との関係性において決定・実行されるという特性がある。したがって、避妊が実施できるためには、相手の要因によって左右されない避妊に対する確固たる態度を形成する必要がある。今後の性教育においては、本研究から得られた知見をもとに青少年の認知レベルに働きかけ、彼らが性交や避妊に対し建設的な自己決定ができるような支援が必要である。その具体的手段とし



て、ロールプレイやピュア・エジュケーション、思春期保健対策（赤ちゃんふれあい体験学習）などの参加型学習が有効であろう。

最後に本研究の自由記述は、無回答が非常に多く、回答された場合でも対象者の意図が十分記載されておらず理解が困難であった。積極的理由と消極的理由への分類については、その精度を確保するために見解が一致するまで研究者間で検討を重ねたが、分析対象が少ないことから統計的検定ができず、結果の一般化には限界がある。また、実際の避妊の有無とその理由についての調査が可能であれば、避妊が必要という認識と実際の避妊行動との乖離についてより明確な示唆が得られると思われる。今後、避妊の複合的モデルの作成と併せて、さらに検討をしていきたい。

本研究は、平成12年度名古屋市立大学特別研究奨励費の助成を受けて実施した。

本論文を作成するにあたり、本研究の趣旨を理解いただき、快くご協力くださいました各学校の先生方、学生の皆様に深く感謝の意を表します。

#### 文 献

- 1) 桑島昭文. 健やか親子21と思春期保健対策. 思春期学 2002; 20 (3): 311-316.
- 2) 財団法人母子保健事業団. わが国の母子保健—平成17年—, 2005.
- 3) 久野孝子, 舘 英津子, 小笠原昭彦, 他. 大学生の性に関する態度と自己同一性および自尊心との関連. 日本公衆衛生雑誌 2002; 49 (10): 1030-1039.
- 4) 財団法人日本性教育協会. 青少年の性行動—わが国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告—, 2000.
- 5) 関塚真美, 関 秀俊, 笹川寿之, 他. 大学生の避妊行動とSTD予防における自己決定意志. 思春期学 2004; 22 (1): 149-156.
- 6) 渡辺 尚. 10代妊娠の現状. 産婦人科治療 2004; 89 (1): 30-36.
- 7) 幡 研一. 10代の人工妊娠中絶について. 日本医師雑誌 2004; 131 (10): 1537-1540.
- 8) 町浦美智子, 本間裕子. 性・セクシュアリティに関するコミュニケーションの実態. 思春期学 2004; 22 (2): 248-254.
- 9) 園田恭一. 健康の理論と保健社会学. 初版3刷 東京: 東京大学出版会, 1998.
- 10) 上田明子, 海原美保子, 中田千恵, 他. 未婚の若年女性の避妊に対する意識と行動の実態. 北陸公衆衛生雑誌 2002; 28 (2): 98-102.
- 11) 福本 環. 男女大学生の避妊に対する態度—性差, コンドームの使用頻度の差からの検討—. 思春期学 2004; 22 (4): 527-536.